

境界 6

女たちが最初に理解していた。

学びを通してやって来る真実がある。

経験を通してやって来るものもある。

そして、受け入れるのがもっと難しい真実が存在する。

他人が私たちより先に見てしまう真実だ。

長いあいだ、観察者は自分のほうだと信じていた。

分析する専門家。

評価する男。

まわりで起きることを解釈する人間。

私は間違っていた。

振り返ってみると、私の人生でもっとも重要な事柄のいくつかは、道の途中で出会った女たちのほうが先に理解していたと気づく。

彼女たちのほうが教育があったからではない。

彼女たちのほうが幸運だったからではない。

私の知らない情報を持っていたからではない。

ただ、見えていたからだ。

違うやり方で。

より速く。

より深く。

よりわき見せずに。

男たちはしばしば結果に魅了される。

女たちは、それよりずっと多くの場合、兆しを観察する。

男は方向を見る。

女は動きを見る。

男は言葉を聞く。

女は言葉が言わずに済ませていることを聞く。

もちろん、いつもそうだというわけではない。

だが注意に値するほどには頻繁にそうだ。

職業人生の中で、私は並外れた女たちに出会った。

マネージャー。

仕事仲間。

顧客。

経営幹部。

母親。

娘。

友人。

多くは異なる国から来ていた。

異なる言語。

異なる文化。

それでも共通の特徴を備えていた。

人がまだ自分自身を理解しないうちに、その人を理解していた。

初めのうち、私はこの能力を直観だと考えていた。

時とともに、それを人間の経験と呼ぶようになった。

なぜなら多くの人がデータを観察しているあいだ、彼女たちは人間を観察していたからだ。

そして人間はいつもデータに先行する。

数字の中で起きることは、ほとんどいつも人の中で始まる。

私の道のりを変えることになる変化の多くは、私よりも先に一人の女によって見抜かれていた。

それは小さな細部であることもあった。

ひとつの言葉。

ひとつの沈黙。

ひとつの気がかり。

一見どうしてもよさそうな、ひとつの指摘。

目を見張るようなものは何もない。

芝居がかったものは何もない。

それでも、数か月後、数年後、その言葉は戻ってきた。

そして正しかった。

時とともに、私は耳を傾けることを学んだ。

礼儀のためではない。

知性のためだ。

なぜなら世界は、ただ一つの視点から理解するには複雑すぎるからだ。

どの人間も道の一部を見ている。

地図の全体を見ている者はいない。

私の人生を通り過ぎた女たちは、どんな会社にも教えられなかったはずのことを教えてくれた。

関係は取引に先立つ、ということを。

常に。

契約は合意を作れる。

関係は信頼を作れる。

そして信頼は、契約ではもう足りないときにも生き残る。

信頼の欠如ゆえにすべてを失う、とても力のある人々を見てきた。

そして信頼のおかげで世界を築く、一見か弱い人々を。

私の物語の中にいた女たちを思い返すとき、役割のことは考えない。

目に見えない貢献のことを考える。

功績を認められることなく加えてくれたもののことを。

現実の異なる部分をひとつにまとめておく力のことを。

家族。

仕事。

人間関係。

傷。

希望。

多くの男は人生を目標の連なりとして進む。

多くの女はそれをつながりの網として進む。

だからこそ、いくつかの結論に先にたどり着くことが多いのかもしれない。

絆が見えている。

影響が見えている。

帰結が見えている。

すべてを自分ひとりで解決しなければならないと思
い込んでいた時期を覚えている。

男たちのあいだに蔓延している病だ。

強さは自足と一致すると考えること。

助けを求めるのは弱さだと考えること。

傷つきやすさは欠陥だと考えること。

その思い込みを取り壊したのは女たちだった。

大演説によってではない。

手本によってだ。

本当の強さとは、すべてを支えることではないと示
しながら。

すべてをひとりで支えなくて済むほど強い絆を築く
ことなのだと。

それは革命的な発見だった。

なぜなら世界を見る私の眼を変えたからだ。

そして自分自身を見る眼を変えた。

どの文化も成功について独自の定義を持っている。

肩書き。

地位。

金。

名声。

時とともに、別の物差しが存在することを学んだ。

残ってくれる人たち。

得るものが何もないときに、傍らにとどまってくれる人たち。

君自身が信じるのに苦労しているときに、君を信じ続けてくれる人たち。

君のいちばん良い部分が現れるより前に、それを見してくれる人たち。

私の人生でこの役割を果たしてくれた人の多くは女だった。

その現実を無視することはできない。

本はしばしば英雄を讃える。

伝記は主人公を讃える。

現実の人生はずっと正直だ。

どの道のりの陰にも、それを築くのに力を貸した人たちがいる。

見出しには現れない人たち。

認められることを求めない人たち。

他人が署名するものを可能にする人たち。

私の物語を通り過ぎた女たちを思うとき、私が思うのはまさにこれだ。

彼女たちの、見る力。

理解する力。

支える力。

正す力。

先取りする力。

そして何よりも、単純な真実を思い出させてくれる力。

誰もひとりでは本当に何も築けない。

作品に署名することはできる。

写真に写ることはできる。

物語を語ることはできる。

だが、どの物語の陰にも、いつも目に見えない共同体が存在する。

私の場合、その共同体の重要な一部は女の顔をしていた。

だから、この境界の題は挑発ではない。

認める言葉だ。

なぜなら何度も、何が起きているのか私が理解するよりずっと前に、彼女たちはすでに理解していたからだ。

女たちが最初に理解していた。